

## アルシェイラ=グロムナイト

ハロウィンの時期になると現れる拘束衣の女悪魔。  
影を操る力を持ち、気に入った人間の女の子を見つけたら影から伸ばした触腕で拘束し魔界の自宅に連れ帰る。  
連れ帰った女の子はメイドとして調教し、戦闘や夜伽などそれぞれの得意分野を活かした役割を与え侍らせている。

正体は魔界の有力悪魔である五大候の一柱。  
取り決めによって人間界に干渉出来る時期がそれぞれ設けられており、アルシェイラはたまにそれが人間界のハロウィンの時期であった。

“縫われし女帝”（シームレス・ソヴリン）の通り名を持ち、拘束衣の上に影から伸びた光の鎖によって普段から魔力を本来の2割程度に制限させられている。でも強い。  
この鎖は千年前に相対した人間の巫女が命と引換えに顕現させたもので、彼女が唯一殺しきれなかった者の封印。  
儂くも尊いその様を見て初めて人間に惚れたアルシェイラは、以来気に入った人間を手元に置き愛玩するようになった。  
鎖はアルシェイラにとってその最愛の人間との思い出であり、封印が弱まった今となっては解くことは容易いが彼女は決してそれをしようとはせず  
今日も鎖によって影に縫い止められている。

違和感なく溶け込めるように  
作った簡易使い魔のパンプ君β





「——今節の人間界の催しも悪うなかつたのう。  
刹那を生きる命共の、創意工夫を凝らした趣向……」

「まこと妾の想像外ばかりで実に楽しめた。

望外の出会いもあったしの——のう？ルセリア・エトワールよ」

「.....」

「そう睨むな。人間を盾にして其方そなたを無力化したことは謝ろう。  
あの者達はすぐに解放した。危害を加えるつもりは一切ない」



「……それは、信じます。貴女にとってあれは本意ではなかったはず」

「魔界の『五大候』の一柱、アルシエイラIIグロムナイト——  
人質がなくなっちゃって、私が貴女に勝てたかはかなり怪しかった」



「ふふふ、謙虚じやのう。」

拘束されておる妾の力などたかが知れておるといふのに」

「それでも、です。貴女が本来の力を振るえるなら、私なんて一瞬で葬られるでしょうから」



「それはお互い様じゃ。」

「其方、魔力をかなり自己の体内の健常化に使うておろう？」

「っ！どうして、それを……！」

「『布』で捕らえればその者のことはある程度わかる」



「魔力もそうじゃが身体の組成素のバランスが乱れておる。  
——其方、かなり身体をいじられておるな？」

「——っ!?」

「仔細は知らぬが、敗北と汚辱の残り香が全身から匂うておるわ」



(そんなことまで知られてるなんて……)

「故にこそ気に入ったのじゃ」



「ア……………」

「敗北し、貶められ、そして堕ちて……それでも尚そこから這い上がり輝くその気高さこそ『人間』の美しさよ」



「どうやら……意味ですか」

「ふふ、ただの嗜好じゃよ。妾はそういう人間を愛しておるし、  
そして愛した者は必ず妾のものとする。それだけのことよ」



「あうっ！ な、なんですか、これは……！」

「妾の『影』の中で醸造した感情の組成粘液……まあ、『愛』じゃな  
「あ、愛……!?」



「愛する者を妾の眷属へと作り替えるための小道具よ」

「それに包まれることで自然と身体が妾のものになっていくが、強い抵抗力があるものには中々に浸透せぬ。愛を伝えても、応えてくれねば意味がないのと同じじゃ」



（抵抗力………？この布で魔力が抑制されてる状態じゃそんな………！）

「安心せよ。この場合の抵抗力とは心の在り方の話よ。

心から抵抗し、敗北を認めなければただのローションに過ぎぬ」

（っ!?心が読まれてる………これも布の力………?）



「フフッ、怯えることはなからう。

たんに魔力の波長と電気信号を読み取っておるだけじゃ」

「さて、では肝心の愛を伝える方法じゃが……  
其方にはこれが良さそうじゃな」





「では動くぞ」

「ま、待つ……ああッ♡んあああッ♡」

ほ♡ちゃん♡♡  
ほ♡ちゃん♡♡



「反応が良いな。開発されきったその肢体でよくぞ人間の為に  
未だ戦い続けられるものよ」

「こん、なっ、こっ、♡♡♡してもっ……も、もう、私はっ、屈しないっ♡♡♡」

「それが其方の意地なのじゃな。まこと愛いやっじゃ」

はっちゃん♡♡

はっちゃん♡♡



「じゃが、び、は正直なようじゃぞ？」  
「えっ……あ、あぁっ……!?」

はっちゃん♡

はっちゃん♡



「そんな、どうして……！」

「ここは妾の領域じゃからのう。心が揺らげば浸食は進む。

——其方、今かつての敗北の記憶を想起したじやろう？」

はっちゃん♡

はっちゃん♡



「っ!?」

「乗り越えた過去だとしても、心が快癒したとしても……」



ほちゃん♡

「捨ててしまったものは元には戻らん。折り目のついた紙と同じ。

其方の精神と全身の細胞は、『屈辱と敗北』を甘い甘美なものとして受け取るよう癖づいてしまっておるのじゃよ」

「ち、ちがつ……わた、私……あああんっ♡」

「そう照れずとも良い。妾はそんな其方も愛したいのじゃ。  
故に、遠慮せず乱れるが良い」

は♡ちゃん♡♡

は♡ちゃん♡♡



「あぁっ♡やっ♡こんなっ♡あぁっ♡弱い、とっろ、ばっからっ♡」

「妾に隠し事など出来ぬぞ。

……ふむ、このざらざらとした隆壁が良いのか？ほれ」

「……」

ほ  
ち  
ん  
♡

ほ  
ち  
ん  
♡

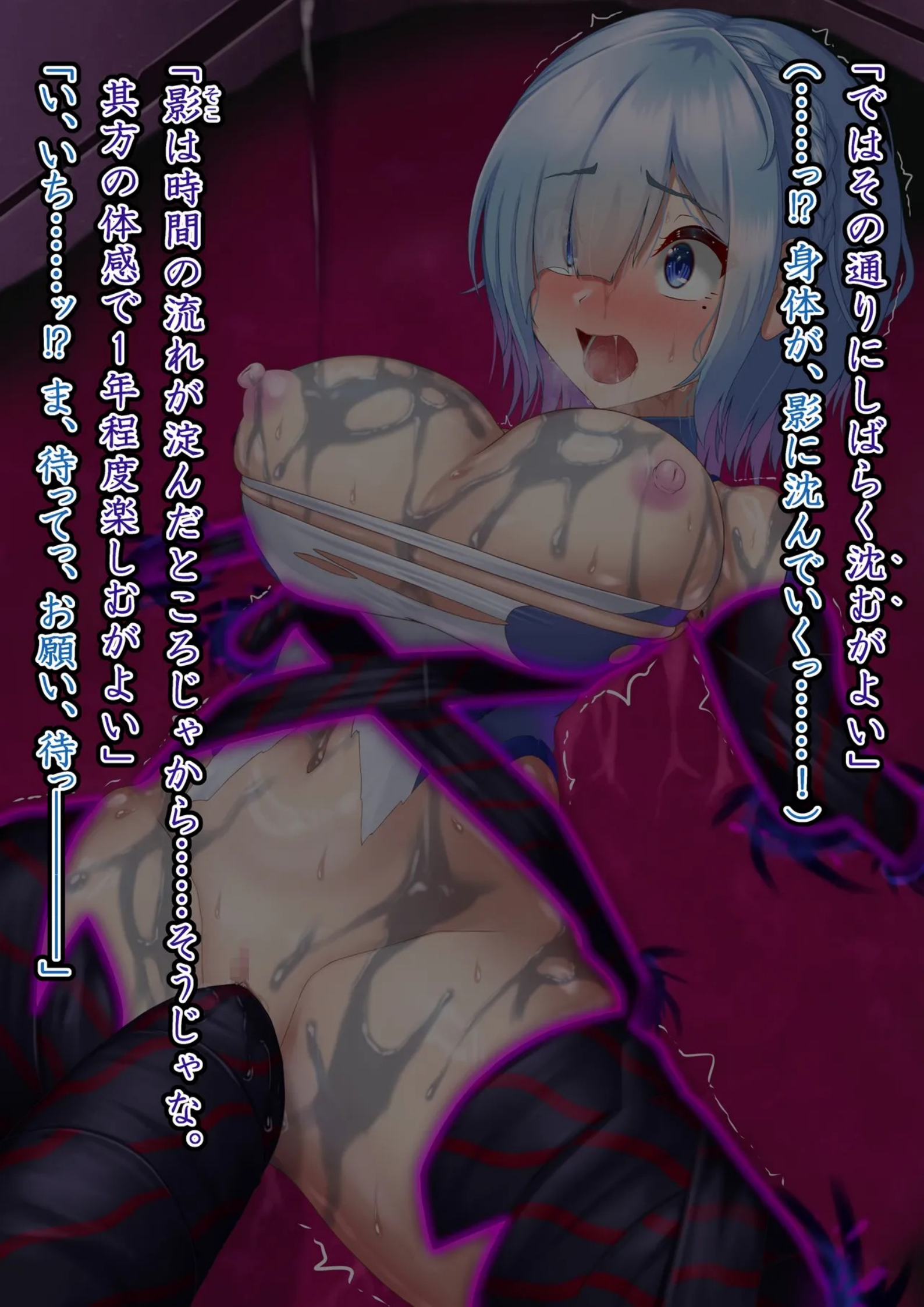


「~~~~♡♡はあっ、はあっ、はあっ……♡」

「絶頂と同時に母乳……いや、これは魔力か。なるほどのう」



「魔力漏洩体質に、この箇所とぶくりと膨れた子宮口手前の上部、何より子宮そのもの……それが其方のか弱いところなのじゃな」  
（だめ、バレてる……私の性感帯、開発されたところ、全部っ……！）



「ではその通りにしばらく沈むがよい」

（……っ!? 身体が、影に沈んでいくっ……!）

「影は時間の流れが淀んだところじゃから……そうじゃな。

其方の体感で1年程度楽しむがよい」

「い、いち……ッ!? ま、待ってっ、お願い、待っ」

ド

ゴ

シ

ズ



「……………ぷ、ぷ、そろそろかのう。【強よ】」

「……………ほう。これは驚いたのう」

ほ  
ちゃん♡

ほ  
ちゃん♡

「か、はっ♡はあっ♡ああ、そこっ♡あ、いくっ♡またいつちやううッ♡」

「『愛』がほぼ浸食しておるが、まだ完了はしておらぬ。

その身体と心で……まだ敗北に支配されておらぬというのか」

ほっちゃん♡

ほっちゃん♡



「クフフフツ♡エトワール、なんと強き少女か。  
決めたぞ、其方は絶対に妾のものにする」

「ただの一従者にするなど勿体ない。戦闘も、身の回りの世話も、  
そして妾の閨も……♡  
妾の第一の側近として眷属化を行うこととしようぞ」

ほっちゃん♡

ほっちゃん♡



「あああああ♡♡……………は、あ♡……………」  
「あ、アルシテイラ……………様……………?」

「そうじゃ。妾が其方の主じゃ。既に心に刻まれておろうが  
今からそれを身体にも刻んでおくぞ」  
「あつ……………なに、を……………」



「ブーン」

「は、ぐんぐん?」

「其方の子宮に妾の眷属となる約定——隷従契約を施した。  
妾が魔力と『愛』を直接注ぎ、其方がそれを受け入れれば  
其方は妾の眷属へと生まれ変わるのじゃ」



「け、ん……ぞく……？ わた、し……だ、め……」

「~~~~♡ 無意識に妾に敬称を付ける程に心が堕ちようとも、  
本能的に自らの使命と信念を思い起こす……♡  
はあ、それでこそ『人間』じゃ♡ 妾の愛する生き物じゃ♡」



「お、ぐんぐん♡♡♡あ、おんぐん♡♡♡」

「其方のその意志は実に尊い——だが駄目じゃ♡」

「其方は妾の眷属となり妾に未来永劫仕える運命さだめなのじゃ」

ほ♡  
ちゃん♡♡

ほ♡  
ちゃん♡♡



「クフフフツ♡ 凄いのう、其方の危機感と焦燥、そして興奮が  
余すところなく伝わってくるぞ♡」

「ち、がっ……あああんっ♡」

「違わぬぞ、嘘はつけぬ。其方は抵抗出来ぬままに相手の意のまま  
敗北を味わうことをこの上なく悦ぶ難儀な女じゃ♡」

ほっちゃん♡

ほっちゃん♡

「影の中に縛っておる手足をばたつかせ、全力で身を振って……  
それら全てが無為に終わることに絶望し、歓喜しておる」

「認めるのじゃ。其方はもはや麗しき星奏煌華ルセリアではない。  
正義の心を備えながら敗北に喜悦を覚える、  
卑しく気高い妾の眷属じゃ♡」

ほっちゃん♡  
ほっちゃん♡



（わ、わたし……また、敗ける……？）

「うむ。妾には絶対勝てぬ」

（なのに、こんなに、身体、悦んで……）

「それでよい。妾はそんな其方を『愛』しておる」

ほっちゃんっ♡

ほっちゃんっ♡



（愛、して……こんな、わたしを……で、も……先、輩……）

「懸想の相手か。良い、許す。その者を心の片隅に住まわせるがいい」

「妾のことを最優先にし、妾で心の大半を埋めるのであれば  
それくらいのことは許可しようぞ」

ほっちゃん♡  
ほっちゃん♡





(ああ……なら、もう……)

ほ  
ちゃん♡  
♡

ほ  
ちゃん♡  
♡



「はっ、はっ♡あっ、わ、私、ルセリア・エトワールはっ……♡  
あ、アルシテイラ様に敗北しっ……」

「この身を捧げ、け、眷属となる、ことを………ことを………♡」

「——言え。言ってしまったえ、エトワール」

「あ、ああっ……あああッ!!」

ほっちゃん♡

ほっちゃん♡



「アルシエイラ様の眷属となることを、  
この契約の下に誓いますツツ♡♡」

ほっちゃん♡♡

ほっちゃん♡♡



「確かに聞き届けたぞ」

「では受け取るが良い。これにて契約完了じゃ——!!」

ほっちゃんっ♡

ほっちゃんっ♡



「♡♡♡♡♡」



フタコ













A blue-haired anime girl with a shocked expression, her mouth wide open and eyes wide. She is holding a large, dark, multi-lobed object that resembles a large, dark, multi-lobed fruit or a piece of machinery. The object has a white band around its middle. The background is a dark, reddish-purple color with some glowing purple lines. The girl is wearing a blue top and a red and black striped skirt.

「美しいのう。妾の『愛』は完全に其方の身体を侵食した。それはもはや其方の第二の皮膚と言って相違ない」

「契約紋もくっつきりと浮かんでおるな。


クフフツ……これで其方は妾の眷属。妾が死ぬまで自然死はない。生物としての寿命を超越した存在となったのじゃ」



「心も妾に捧げられておるから、裏切ることも絶対になり得ぬ。どうじゃエトワール。妾をまだ倒したいかの？」

「い、え……あり、えませんっ……♡」

私は……ルセリア・エトワールは、アルシエイラ様の、忠実な眷属……アルシエイラ様の為に、この身を捧げることが、存在意義、です♡」



「そうかそうか♡それが聞けて妾は嬉しいぞ。  
では早速、其方に似合う装いを用意せねば」

「其方は可憐であるからな。人間界のあの『めいどふく』など  
さぞ似合うであろう。あるいは星奏煌華の衣装を模した  
専用服を特注するのも良いな……ああ、胸が踊る！  
エトワール。其方はしっかり飾り立ててやるからのう♡」



「……はい。

全てアルシエイラ様の仰せのままに——」



















ほちゃん♡♡

ほちゃん♡♡



ほちゃん♡♡

ほちゃん♡♡





ほちゃん♡

ほちゃん♡











ほ  
ちゃん♡  
♡

ほ  
ちゃん♡  
♡









ほっちゃん♡

ほっちゃん♡



ほっちゃん♡♡

ほっちゃん♡♡



ほ  
ちゃん♡  
♡

ほ  
ちゃん♡  
♡



ほ  
ちゃん♡  
♡

ほ  
ちゃん♡  
♡



ほっちゃん♡♡

ほっちゃん♡♡



ほ  
ちゃん♡  
♡

ほ  
ちゃん♡  
♡



フタゴイ





ハッ  
ハッ  
ハッ

ブ  
ニ  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア





